

UBUD

GOKURAKU TSUSHIN Vol.18



vol. 18

U・B・U・D I・N・D・A・H



photo:Y.Hori

さて、写真は UBUD の「影武者」の座布団でくつろぐ猫(確か名前はシートだったと思う)である。

なんとも気持ち良さそうに寝ている。バリで飼われている猫はたいていの場合、自然食品によるおいしい餌とあたたかい気候と飛び回って遊べる庭先などが保証されている。これはうらやましい環境である。しかも「影武者」では膝の上で甘えさせてくれるお客も結構いる。

そこでいつも思うのだが、輪廻を信じるとすると次に生まれてくるときはバリで飼われている猫がいいと願う。あくまでもかわいがって飼われているのがいい。これに勝るものはない。(と信じている) 実現するべく、寺院でスンバヤンする時にお願いしていたりもする。(おいおい...)

蛇足だが、バリでノラ犬に生まれるのは不幸だとも思う。これだけは何とか避けたいものである。

堀 祐一

Contents

● Kabar Baru Berita Lama	
ブレボン (Pelebon) -----	4
バリの芸能がホテルで公演禁止?!-----	5
UBUD でインターネット -----	6
● Topeng	
バリの舞踏／トペン -----	8
● Enak・Enak・Ubud/10	
ジャジョーでルンルン -----	12
● C・O・L・U・M・N	
エナちゃん怒りの戦争ゲーム -----	15
● NUSAPENIDA	
ヌサペニダ -----	16
● Lancong Lancong Bali/5	
ランチョンランチョンバリ／5 -----	18
● Odalan	
オダラン体験／ヌサペニダ -----	20
● TOKO BEST 店	
KO・Senang-Senang-----	22
● Warung 味な店	
NYIUR Cafe -----	22
● Pondok Manis 私の常宿	
Tman Cottage-----	23
● Pesan & Kesan	
旅人一声-----	23
● Berita Terbaru	
その他のニュース -----	24
● Orang-orang Ubud/18	
うぶんな人々／18 -----	25
● Pengumuman	
でんごんぼん -----	26

○表紙のことば○

BALIで、
ナシチャンプルに
はまった私は、日本に帰
ってからもしばらくひとつ
のお皿にごはんとおかずを盛
りつけ、手で食べていた。しか
し、あることに気づいてやめ
た。それは「納豆は手づかみ
で食べにくい」という事
であります。
津田さと子

編集室便り

●入稿に関するお願い

編集部では、Macintosh による DTP 作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方で Text Data で入稿可能な方は、以下の方法をお願いします。

Macintosh フォーマットの FD (Text Data)

Dos フォーマット (2DD-720KB) の FD (Text Data)

E-Mail :
MHC03202: 菅原 (NiftyServe)
GCB01162: 堀 (NiftyServe)
hori@potomak.com (Internet)
eriko@potomak.com (Internet)

※詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせください。

プレボン (Pelebon)

1996年12月28日：ウブドの王族、Tjokorda Gde Ngurah Sudarta氏（1909年1月23日生まれ）の火葬式・プレボン（スードラ階級の火葬式はガーベンと呼ぶ）が行なわれました。

数か月前から、UBUDで30年ぶりの大きな火葬式があるという噂で持ちきりでした。それを聞きつけてか、JL RAYA UBUDの沿道には黒山の人だかり。道は車の通行禁止で遊歩道状態。巨大なバデ（遺体を収めて火葬場まで運ぶ、塔の形をしたもの）は、高さがほぼ10メートルにも及ぶため、なんと、道路の上の電線を切って通過するのです。そのため、この日は、UBUD全域が停電。そして、デンパサールと空港にしかないと思っていた消防車が二台も待機しています。ギャニャール県の所有する消防車のように。ちなみに消防車は散水車がわりに使われていました。



午後1時：バレガンジュールの音で儀式は始まりました。先頭に黒いルンブー、その後にナガー・ロアング／Naga Roang（龍）のをせたバレにブダンドが乗ってマントラを唱えています。最後に十一層のバデ、何人もの親族がそれに乗っています。

葬儀の行列には観光客、そして葬儀参列者がJL RAYA UBUDをうめつくしました。その数は、数千人にも及ぶほど。遺体は王宮の塀を越え、バデに収められ、火葬場ではバデから、スキーのジャンプ台のようなスロープを使って火葬堂に降ろされ火葬されました。

ここでハプニングがひとつ。火葬場と隣合わせのプラ・ダラムの屋根に火の粉が飛び、危うく大火事になるところ。人々はアクアの入ったボトルを投げて消火したそうです。せっかくの消防車はいったい何だったのでしょうかね。翌日、プラ・ダラムでは清めのウパチャラをしたそうです。とにかく、規模の大きさといい、人出の多さといい、停電だの、火事だの、のハプニングといい、大騒ぎのプレボンでした。



●道端に転がるぶった切られた電線…。



バリの芸能がホテルで公演禁止?!

昨年末の新聞『Bali Post』に、こんな記事が載っていました。

バリの観光庁 (Dinas Pariwisata Daerah Bali. 略して Diparda) から、先日、こんな法案が出されました。

ホテルやレストランで、観光客のためにバリの芸能を公演することを禁止するというものです。それに対し、バリ州長 (Gubernur) であるイダ・バグース・オカ氏は「私には、まだ理解できない」と、全面賛成でないことを表明。今、関係者の間で物議をかもし出しています。イダ・バグース・オカ氏はさらに「公演の内容によっては、今までどおりホテルで公演してもよいのではないか。伝統色の濃いもの、たとえばバロンなどはいけない。そういう伝統的なものは、観光客が村々に行き行って観ることになるだろうが、新しく創作されたウエルカム・ダンスのような踊りなど、どうしてダメなのだ?」と発言し、全面禁止にするのではなく、状況をみながらにしては、と提案しています。全国ホテル協会バリ支局の代表、イ・グスティ・バグース氏は「バリのアーティスト (ガムラン奏者、踊り手) に対して支払われる報酬が少なすぎるのがいけないのだ。是非ともアーティスト組合を発足させる必要があるだろう」と述べています。他にも「この法案は、あらゆる面でメリットがある。観光客がバリの伝統芸能を観に直接村々に行くようになれば、村人達が直接収入を得ることができる」という意見も出ています。

しかし、この法案の本当の理由は「バリの芸能を安売りするのを避けるため」だと言うのが Diparda の弁。ホテルで公演する Seniman (アーティスト) へのギャラが安すぎることは、以前から何度も問題になっていました。極端取材班の知る、あるひとりの踊り手 A 嬢は、高校生の全バリ・オレッジ・タンプリリンガン・コンテストで 2 位をとったことのある実力派。彼女は週に 2~3 回、パトゥアンの知り合いのグループに頼まれて、ヌサドゥアヤクタのホテルに踊りに行きます。それもインペリアルだの、ヒルトンだのという一流ホテル。夕方早くからマンディして、家で一時間ほどかけて、ていねいに踊りの化粧をし終えると、グループの踊り手専用のバンがお迎えに来て、6 時には出発。そして、再び家に帰って来るのは、夜中の 11 時。これで、一回 8,000 ルピアのギャラなのだそう。夜

更かしなど、ふだんあまりしないバリの女の子。A 嬢もよく疲れがたまって寝込んでしまう、と言っていました。「本当は行きたくないのよ。こんなたいへんなことをして 8000 ルピアなんて、お金足りないから家で休んでいた方がよっぽどいいわ。でも知り合いの頼みだから、断れなくて…」

さらに取材班が、あるガムラン奏者に聞いた話では「踊り手はまだいい。Penabuh (ガムラン奏者) なんて、ひとり 1000~2000 ルピアだぜ、笑っちゃうだろう」なんていうこともあるそうです。今でも、ホテル側の支払う総額は 20~30 万ルピア前後が相場だそうですが、それには、ナシ・ブクス (お弁当) 代やガムランを運ぶトラックなどのすべての経費が含まれている

のです。ベモヤバンに乗って行ける団員はまだいい方で、ほとんどの Penabuh はトラックの荷台に乗ってホテルまで往復するのです。「二流の歌手をジャカルタやフィリピンから呼ぶのに何百万ルピアもかけてるくせに、バリのアーティストには、何千ルピアだなんて、どうかしてるよな」とは先ほどの Penabuh。「ひとつの部屋の一晩の料金と、ガムランをチャーターするお金が同じ額だって知った時は、ちょっとびっくりしたよ。バリの Seniman として名の通ってる Penabuh のおじいちゃんなんか、トラックに乗せられて、ディナーを食べてる観光客の前で、2 時間もクンダンたたいて、このギャラじゃあ、可哀相だよ」

この法案が通って、観光客が村々に行き行ってバリの芸能を観ようになるのは、それなりにいいことかもしれません。でも、伝統芸能の存続のためにも、バリの Seniman の価値、をもっと正しく評価してあげてほしいと思います。バリの州長さん「私には理解できん」だなんておっしゃらないで、少しでもバリの Seniman のことを考えてあげてください。お願いします。



Illustr: Fumio

UBUD でインターネット

ぬほりん

最近インターネットという言葉がすごい勢いで普及しつつある。

言葉だけが独り歩きしているだけかと思いきや、案外そうでもなく、パソコンとインターネットのIDを持つ人が着実に増えてきているようだ。

それはそれで僕のように仕事に使っている身にとっては、「ふむふむ、インフラが整えば色々な面で使いやすくなるし費用も安くなってきていいぞ。」と思うのだが、日本でハードな仕事に追われていると、隙を見てなんとかかつくった休暇でバリに滞在するときには、コンピューターやテレビなどからなるべく離れていたいと思っていた。電話などもない方がいいのである。

しかし、そう考えない人も当然いるようで、バリにいてもインターネットでアクセスしたいという要求はひそかに（かどうか知らないが）あったみたいである。というのも、最近 UBUD でもインターネットの言葉を見掛ける（聞く）ようになったからだ。しかもプロバイダーがいくつか出現していることは知っていたが、UBUD にインターネットカフェが存在するとは思わなかったのである。

というわけで、休暇中でモニター画面など見たくないという心境が好奇心に勝てず、UBUD にあるインターネットカフェをちょっと覗いてきたので報告しよう。

場所は UBUD から Andong を抜けて Tegalalang にいく途中の Petul の道沿いである。「TRIO Cafe」というその店は Business Center と銘打っているだけあって、扱う業務としては次のようなものがある。

- Packing and Shipping
 - Storage Rental
 - Pick-Up Car Rental
 - Show Room
 - Buying Agent
 - Delicious Breakfast and Lunch
 - Business Consulting
 - Visa / Legal Papers
 - Indonesian Export Products
 - Fax and Photo Copy
- そして、
- E-mail and Internet

キャッチフレーズには「While staying in Bali visit the island's first Internet and Business cafe」とある。

店はなかなかきれいな感じで、入ると受付のようなデスクの奥にパソコンが設置されたデスクが並んでいる。ざっと見たところ Windows が走るデスクトップマシンが3台とラップトップが1台。それぞれのマシンは西洋人がモニターに向かって何やら作業している。まるでどこかリゾート都市のオフィスのような雰囲気でもある。店内右側にはカフェとしてのテーブルやカウンターがあるが、今回は残念ながら食事も喫茶もしなかったの味の程はわからない。

う〜む〜とうなりながらキョロキョロと店内を物色していると、「May I help you?」とおねえさん（バリ人と思われる）に声をかけられてちょっとたじろいだ。（なにしろ一瞬ここがバリなのかカリフォルニアなのか見失ったので。）

インターネットでどういうサービスをしているのかを聞くと、E-mail の代行送信と受信、または時間単位でのマシン使用ということである。

E-mail 送信は1件につき Rp.2,500 で、受信は Rp.1,000（プリントアウトは別料金）である。受信したメールに関しては掲示板にリストされるようである。また、時間貸しのマシン使用では Web をネットサーフすることも可能であり、こちらは Rp.30,000 / 1H となっている。

全体的に小奇麗で本格的にサービスを行っているという印象である。対象は明らかに西洋の人であるが、日本人でも使えないわけではない。



そしてここは別に実は UBUD にもう 1 件 E-mail の扱える店がある。これはプリンガジュイタの手前にある「Roda Tourist Service」という店で、ここはインターネットカフェというよりはインターネットワゴンといった方が雰囲気である。(とはいっても食事や喫茶の設備はなく、狭い店内にマシンも 1 台しかないのであるが。)

ここも本来はツアーコンサルタントなどをしている店のようだが、E-mail の送受信代行サービスもやっている。(看板が異様ではあるが) E-Mail は送受信とも Rp.1,000/1 件 (プリントアウトは別で Rp.2,500/A4) という料金設定。ただしメールの打ち込みは自分でやるようになっていて、このためのマシン使用が Rp.1,500/15 分である。(こちらも Windows である。) こちらの店の印象はなかなかバリの的な雰囲気 TRIO Cafe とは対照的である。

どちらの店も接続環境を見ると、プロバイダーは wasantara.net である。ただし、wasantara.net 自体がそんなに太い回線を確認しているとも思えないし、ISDN など当然ないのでアナログの 28,800bps あたりで実感としてどれくらいの接続スピードなのかは定かではない。(モデムのボーレートを聞くのを忘れた。これじゃちっとも報告になってないな。) ちなみに個人で mega.net を使用している K 氏によると、昼間は話し中ばかりでなかなかつながらないということである。

また、ネックとなることは日本語の扱いで、当然日本語処理ができないマシンなのでメールもアルファベットを使用したものになる。ここで疑問となるのは「TRIO Cafe」におけるローマ字で書いたようなメールの送信代行であるが、日本語のローマ字をキー入力するのは結局自分でやるしかないのではないかということ、その場合マシンの時間貸しレートになるかどうかであるが、このことは聞くのを忘れた。

またはあらかじめ用意しておいた日本語の文章をバイナリー形式でファイル添付するという手もあるが、この場合はそのための日本語対応ラップトップパソコンなどを持って行ってフロッピーなどでファイルを渡さないといけない。

返事を受信するにあたって、相手に日本語の使用を制限するように伝えておかないといけない。

ま、そういったことはこの際考えないものとして見れば、どちらの店もなかなか実用的な料金体制ではあるし、電話や手紙よりは利用価値があるかもしれない。なぜならば、バリから送る場合はそれぞれの店の ID を使って手紙の代筆として送るわけで、受取りもその店の ID 経由である。つまり送る側はインターネットの ID を持ってなくても利用できるわけである。(もちろん受取人が E-Mail アドレスを持っていることは必要だが。)

てなわけで今回はこの 2 件をチェックしたが、今後はこういったサービスを始めるところが続々と出てくるのではなかろうか。長期滞在の観光客が E-Mail のやりとりを必要とすることもあるだろうし、たとえラップトップパソコンを持参してきても、バリから接続できるプロバイダーに加入していなければ国際電話で接続しなければならないわけだから高くつく。また需要があればそのうち日本語が使えるマシンを設置する店も出てくるかもしれない。

バリの UBUD にもインターネットの波は押し寄せている。まだまださざ波程度であるから気持ちいいが、これがどういう形でどこまで広まるかによって暴風雨による大波のような騒ぎになるかもしれない。ネットサーファーがクタではなく UBUD に押し寄せることも考えられる。

何といってもバリでデジタル MP 同期接続、あるいは専用線が安く使えるようになれば、移住して仕事を UBUD でしようと考えている人が必ずいるからである。(僕である。)



TRIO Cafe:

Jl. Raya Andong Petulu / Petulu, Ubud, Bali

Tel.: 976709 / Fax.: 976710

E-Mail: trioglobex@denpasar.wasantara.net.id

Roda Tourist Service:

Jl. Bisma #3 Ubud, Bali 80571

Tel & Fax.: 976582

E-Mail: rodanet@denpasar.wasantara.net.id

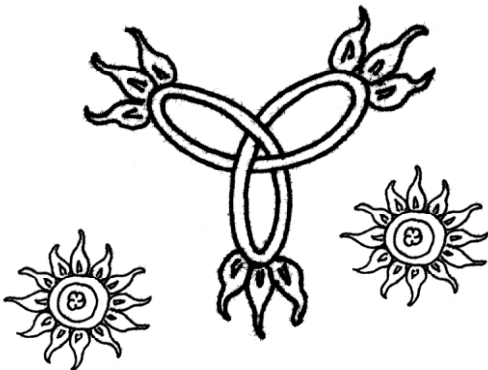


バリの舞踊



Topeng

さあ、今回はバリ舞踊の真髄、トペンの特集です。「トペン」は仮面そのものをさす言葉でもあり、仮面をつけて踊られる舞踊または劇のことでもあります。面だけをさす場合、Tapel (タプル) と呼ぶこともあります。UBUD のプリ・サレンや、その他あちこちで毎晩行なわれているガムランの公演でも、よく踊られているので、みなさんもきっと観たことがあるでしょう。そして、なんと言ってもトペンは、バリ・ヒンドゥー・ダルモの儀礼には欠かせないものでもあるのです。中でもトペン・パジェガンと呼ばれるものは、ひとり（最近はふたりの場合もある）の踊り手が次々にトペンを付け替え、それぞれの面の性格を巧みに表現するという、超ウルトラのワザが必要なトペン劇。ある本には、「パジェガンの踊り手は祖先の霊を宿して高い宗教性が求められる」と書いてあるほど。実際、プラのオダランの初日、プダンド（高僧）による祈りが行なわれている時に、プラの境内でパジェガンは踊られるのですが、この踊り手はそんじょそこの素人ではやらせてもらえず、他の村から、その道のプロ(?)を招いて踊ってもらうことも少なくありません。パジェガンのストーリーは、ババッドと呼ばれるバリの昔々の王朝史を題材にしたもので、いくつものパターンがあります。中でも一般的なパターンは、こんな順番で登場します。



- 1: トペン・クラス (荒々しい型の面)
- 2: トペン・トゥオ (老人をあらわす面)
- 3: プナサール (口から上だけの半面。道化役)
- 4: パティ (大臣役)
アルソ・ウィジャヨ (通称トペン・ダラムと
呼ばれる王様役)
ボンドレス (おとぼけ役の民衆の面。いろ
ろある)
プダンド(高僧の面。高いかぶりものが特徴)
などなど。ストーリーによって使われる面が
変わります。
- 5: シド・カルヨ (最後は必ずこれでシメます。
儀礼がつつがなく、無事に終わるように願っ
て踊られるもの)

ウパチャラ (儀礼) の最も重要な始まりの時、プダンドが鈴を鳴らしはじめ、マントラを唱えはじめると同時にトペンが始まり、プダンドの祈りが終わると同時に最後のシド・カルヨが終わらなければなりません。プダンドがトペンに合わせるのではなく、トペンの演者がプダンドに合わせなければならないのです。このパジェガンの舞台裏 (といってもただの幕の裏ですが) には演者の手伝いをするアシスタントが必ずいて、演者が次に付ける面を完璧にスタンバイしていなければなりません。そして、ひとつのトペンを踊り終わった演者が幕にひっこんだ、その瞬間から、超早ワザでトペンとかぶりものを付け替え、アシスタントが手に持った鏡を見て、お色直し(?)をしながら演者はもう次の面のセリフを唄いはじめるのです。幕の前でふつうに観ていると、その変わり身のすばやさとはとてもひとりの演者が面を付け替えただけのように見えません。ただ面が変わっただけでなく、性格、立ち方、歩き方、しゃべり方、声、クセまで変わるのです。それも一瞬のうちに。



あるバリ人の踊り手に、日本の面（ひょっとこ）をつけたら、どんな踊りになるか、ためしてもらったことがあります。彼は手のひらに面を持ち、顔と突き合わせ長いこと、その面をながめていました。次に手でその面を少しずつ動かしはじめました。「このトベンは、どんな性格なのか、どんなクセを持ったヤツなのか、どんなふう歩いて、どんなふうにししゃべるのか、それがわかってくるまで、こうやって長い長い時間、見つめ合うんだ。そうすると自然に動き出すんだ」。そして、踊る時は、自分自身がそのトベンになりきるのだそうです。みなさんは、トベンの表情が変わるのを見たことがありますか？ 本当に上手なトベンの踊り手は少し踊っただけで、変わるはずのない面の表情を変えてしまいます。そう、少しニッと笑ったり、驚いて目を見開いたり。

あるオダランでトベン・トゥオを観ていた友人が、前方に座っていた日本人のご夫妻が「まあ、あのヒト、よくあんな長いあいだ、まばたきをしないでいられるわね」と言っていたのを聞いて笑っていました。バリの舞踊を語る時、よく「タクス」という言葉が出ます。簡単に訳すと、カリスマとか魂とかの意味合いですが、トベンの踊り手にタクスがないと、面は生きてこないのだそうです。そしてトベンの演者は、セリフ達者でなければなりません。

バジェガンほど儀礼色が強くありませんが、よくオダランの催し物で観ることができるのが、Pelebom（プレンボン）というトベン劇。これは3～5人のトベン演者とアルジョ・プレンボンという、トベンをつけない女性の役者が何人か登場するものです。これも、トベン・クラス、トベン・トゥアなどから始まって、プナサール、ボンドレスなどが続いてあらわれます。クラスやトゥオ、アルソ・ウィジャヨなどは踊りだけですが、劇のストーリー展開に入ると、プナサール、ボンドレスなどセリフが入るトベンが登場して物語が始まるのです。特に道化

役のプナサールは、ストーリーの筋の中に、ジャスト・オブ・ナウの時事問題、世間話、政治問題などをうまく取り入れては、おもしろおかしくひにくったり、冗談を飛ばしたり、時にはちょっとエッチな話題も入れたりなんかして、観衆を大爆笑させます。二人の道化役の掛け合いのセリフなどは、ほとんどアドリブ。話の本筋をちゃんと押さえながら、いかに観衆をあきさせず、舞台にひきつけるか、演者の技量にかかっています。そして、そのハラハラさせるような演者のやりとりやギャグが、昔から常にトベンを新鮮にかつ人気ものにさせてきた大きな要素といえるのです。そう、トベンは、今、観られる数々のバリ舞踊の中で、もっとも歴史が古く15～16世紀には、ほぼ現在のかたちで完成していたと言われます。

山あいの田舎の村のオダランで、初めてじっくりとトベンを観た時の興奮は忘れられません。プラの境内の片隅にランセイ（幕）が張られ、いくつかの電球玉が上からひもでつるされただけの舞台。あおられるような力強いガムランのメロディーがしばらく続いたあと、ランセイの真ん中を踊り手が裏から指でつまんだ時から踊りは始まっていました。ランセイを裏からつまんでふるわせているのですが、そのかすかなランセイの動きに合わせて、すでにクンダン（太鼓）はアクセント（バリ語でアンサルといいます）を入れ始めています。そうやって観衆をわくわくさせたあと、ゆっくり、少しずつ少しずつ、非常にもったいぶったように、ランセイの真ん中からトベンがあらわれた時、もう私は、その場に釘づけでした。トベンの顔が生きているように見えたのです。全身に鳥肌を立てながら観たのを今でも覚えています。みなさんも機会があったらトベンをじっくり観て、バリ舞踊の真髓の醍醐味をあげてください。



●写真の解説●

1. パティ／Patih (大臣)：

トベン・クラス (荒型のトベン) として踊られることが多い。

2. トウオ／Tua (老人)：

静かな動きの踊りだが、その分踊り手のうまいへたがはっきりわかってしまうといわれる。

3. アルソ・ウィジャヨ／Arsa Wijaya (王)：

トベン・ダラムと呼ばれる。ほかのトベンと比べて、やわらかな動きが特徴。

4. ブナサル／Penasar (道化)：

プント (Punta) と呼ばれることもある。物語の進行役、語りなどを担当。口髭から上だけの半面。

5. プダンド／Pedanda (高僧)：

これも半面で、目の部分が大きく開いている。

6. ボンドレス／Bondress (民衆)：

このような口をしたトベンはチュンゲー (Cungih) と呼ばれる。

7. ボンドレス (民衆)：

ボンドレスの中でも、一番こっけいな、おとぼけ役で登場。

8. ボンドレス・トウオ (老いた民衆)：

ブンデサ (慣習村の村長) とも呼ばれる。これも半面。手の持っている竹筒はブンロチョカンというシリー煙草の材料をつぶす道具。

9. シド・カルヨ／Sidha Karya：

魔王の面とも言われるが、儀礼が無事に成功するように、という意味で踊られる。直訳すると Karya=Works.Sidha=Success である。

(Terima kasih banyak)

●写真協力●

フォトグラファー：渡部 赫氏

トベンの踊り手：I Ketut Suwetja 氏

1. Patih



2. Tua



3. Arsa Wijaya





4. Penasar



5. Pedanda



6. Bondress

7. Bondress



8. Bondress Tua



9. Sidha Karya



ジャジョーでルンルン♪♪

さあ、'96年度版最終号の今回、ひさびさにエナエナの登場です。

バリの家庭にいきなり飛び込んで早や8ヶ月。今まで知らなかったおいしいものが、バリには、まだまだたくさんあることを知って、このコーナーの題材には、こと欠きません。「(「だったら早く書けよ〜!」と外部の声。スママセン。) 私事都合により、しばらく筆がとれなかったエナちゃんがおおくりする、今回の特集はジャジョーです。インドネシア語ではジャジャン、バリ語でジャジョー、日本語で「お菓子」。バリにはおいしいジャジョーがたくさんあります。日本とよく似た材料もあって、種類も豊富。おもなジャジョーの材料は、まず、もちゴメ、コメ、そして、その粉、小麦粉はもちろん、タピオカの粉、サグ(サラヤしのでんぷん)、ココナツの果肉、及び、ココナツ・ミルク、グラ・メラ(ヤシからとれる茶色い砂糖)、そして、さつまいもやシンコンいも、何種類ものバナナなどなど。パサールでも毎朝つくりたてのジャジョーが売られています。生菓子のようにしっとりしたものはつくりたてが一番。傷みやすいので買ったらず早く食べてください。

さてここで、家庭で比較的簡単に作れるいくつかのジャジョーをご紹介します。材料は、できればバリに来たときに買って帰ってください。ココナツ・ミルクはパウダー状になったもの(cocos)や紙パックの濃縮液(kala)などがUBUDの小さなストアにも置かれています。(それとも、最近では日本でも手に入るのでしょうか?)そして、グラ・メラは、おそらく日本のザラメでも代用可能だと思います。

さあ、ジャジョー作りに挑戦!!

◆GODOH(ピサン・ゴレン)

私たちにもおなじみ、バナナのフライです。バリ語ではゴドーと言います。てんぷらのように、ただ小麦粉で揚げたものかと思っていたら、実は、コロモはコメの粉。できあがりバリバリするように作りましょう。日本のさつまいもや酸っぱいリンゴなんかも使えそう。

材料:

- フィンガー・バナナ、もしくは、あまり熟していない固めのバナナ適量
- コメの粉(tepung beras)-----1カップ
- 水-----2/3カップ
- 塩-----小さじ1/4
- サラダ・オイル-----適量

作り方:

- [1] コロモを作ります。深めのボウルにコメの粉を入れ、真ん中を、水を注ぎ入れるために少しへこませておきます。
- [2] 水と塩を加え、泡立て器でなめらかになるまで力強くかきまぜます。水分が多くて「ボタボタ」と落ちるくらいだと、うまくバナナにコーティングできません。たらしめて「ぼったり」というくらいに水と粉を調節してください。
- [3] フィンガー・バナナの場合、たてに半分。ふつうのバナナの場合、1~1.5センチにスライスします。
- [4] バナナにたっぷりコロモを付け、油で揚げます。油の温度が高くないように低温でじっくり揚げるのがコツ(10分ほど)。
- [5] コロモがカリッとしたらできあがり。

◆ BUBUH INJIN (ブラック・ライス・プディング)

英語で「プディング」なんておしゃれっばいですが、実は黒いもちゴメを使った甘いおかゆ。ふつうのもちゴメと混ぜて作ります。日本のぜんざいのような味で、とてもなじみやすいおいしさ。ただ、なくてはならないのが、仕上がりにかけるココナツ・ミルク。本当は絞りとての生のココナツ・ミルクだと最高なのですが、手に入らなければインスタントでも OK。そして、茶色いカタマリで売られているヤシ砂糖、グラ・メラもパサールで買えます。いい香りに仕上げるためになくってはならない香草、パンダンの葉とともに、UBUD に来た時、是非買って帰ってください。

材料：

- 黒いもちゴメ (beras hitam) ----- 1 カップ
- ふつうのもちゴメ (ketam) ----- 3/4 カップ
- やし砂糖 (gula merah) のシロップ --- 1/2 カップ
(作り方は下記)
- ココナツ・ミルク (santan) ----- 適量
(ちょっと濃いめにしたもの)
- バニラ・エッセンス ----- 少量
- 塩 ----- 少量
- パンダンの葉 (daun pandan) ----- 4 本

作り方：

- [1] ●まず、やし砂糖のシロップを作ります。ここでは、多めに作っておいて、出来上がったシロップを二分の一カップだけ使いますが、残りは冷蔵庫で長持ちするのでストックしておいてください。
 - おおざっぱに刻んだやし砂糖 2 カップと水 1 カップ、パンダンの葉 2 本を弱火にかけ、よくかきまぜながら約 10 分煮ます。
 - カスやアリなどが混じっていることも多いので、一度こしてからストックします。
- [2] 黒いコメともちゴメをよく洗って、2～3 分水につけておきます。

- [3] ザルにあけて水気を切ったあと、水 5 カップとともに深ナベに入れ、パンダンの葉 2 本も入れて弱火～中火で約 30～40 分、コトコト煮ます。
- [4] 煮えたら、やし砂糖のシロップ二分の一カップを加え、さらに少し煮ます。
- [5] 全体がトロリとしてきたら(コメツブは残っても OK)、塩を加え、味かげんをみます。
- [6] 室温にさましたあと、めいめいの皿に取り分け、バニラ・エッセンスをたらししたココナツ・ミルクをかけて召しあがれ。

※ おかゆは冷蔵庫で冷やしても Bagus。

ココナツ・ミルクは分離するので冷やしチャダメ。

※おかゆがほどよく煮えたら、バナナを小口切りにしたものや、白玉なんかを加えてもおいしい。

◆ AGAR AGAR (バリ風カンテン)

インドネシアでも天草(カンテンのもとになる海藻)がたくさんとれます。バリでは海から取った、まだ潮くさいナマのものを使って作るお菓子もありますが、ちゃんとお菓子用に精製された粉も市販されています。もちろん、日本で売っているカンテンでも OK。ここでは、ココナツ・ミルクと「ムティアラ=真珠」と呼ばれるタピオカ(バリでは Sagu Mutiara)の加工品を使って、ひと工夫したのを作りましょう。出来上がりががとっても POP でかわいいのです。

材料：

- グリーンの色のカンテンのもと
4 カップ分のカンテンが作れる量
- ムティアラ ----- 一袋
- ココナツ・ミルク+水 ----- 4 カップ
- ふつうの砂糖 ----- 小さじ 1
- バニラ・エッセンス ----- 少量
- 塩 ----- 少量

作り方：

- [1]** ココナツ・ミルク+水で牛乳くらいの濃さの液を4カップ用意します。
- [2]** ムティアラをゆでます。多めに沸かした湯にムティアラを入れ、芯がなくなって透明になったらザルにあけ、水気を切っておきます。
- [3]** カンテンのもとと砂糖、塩、そして(1)をナベに入れて弱火にかけ、よくかきまぜながらとかし、沸騰した瞬間に火を止めます。長く沸騰させるとココナツ・ミルクからオイルが出てしまい、仕上がりがきれいになりません。
- [4]** ムティアラとバニラ・エッセンスを加え、大きめの型に入れ、まず、室温でさまします。
- [5]** さめてくるとココナツ・ミルクが白く上に固まります。すると、下の部分のグリーンがきれいになってツートン・カラーのカンテンになります。固まったら、冷蔵庫で冷やして、切り分けて召し上がれ。

ENAK ENAK ENAK
ENAK ENAK ENAK

【写真の解説】

いずれもパサールで買えるジャジヨーです。

■スンピン：

コメの粉をココナツ・ミルクでねって、バナナやカボチャなどとともにバナナの葉に包んで蒸したものの。

■ジャジヨー・ククス：

いわゆるカップ・ケーキ。お供え物にもポピュラーです。小麦粉で作ったものと、コメの粉で作ったものがあり、カラフルでおいしい。

■ジャジヨー・ラピス：

シマウマ模様が特徴。ほのかなココナツ・ミルクの香りと、おさえた甘さが絶品。コメの粉で作ります。ローカルですが日本のうしろろにそっくり。



■スンピン



■ジャジヨー・ククス



■ジャジヨー・ラピス

エナちゃん怒りの「戦争ゲーム」

エナちゃん

最近、またツーリスト向けに、ヘンなビジネスが現われました。それは「ジャングル・スカーミッシュ（戦争ゲーム）」。約一時間、五名ずつの二つのチームが、ペンキ弾を持って、各陣地を奪い合うというゲームらしいです。「ええっ？バリまで来て戦争ゲーム？誰がするのそんなこと?!」と、極通の読者の方だったら思いますよね。それが、いるのです。

先日のバリ日本人会会報に、こんな記事が載っていました。
「突撃体験隊がゆく!! 突撃隊が今回派遣されたのは、その名にふさわしい『ジャングル・スカーミッシュ（戦争ゲーム）』 -途中 略-

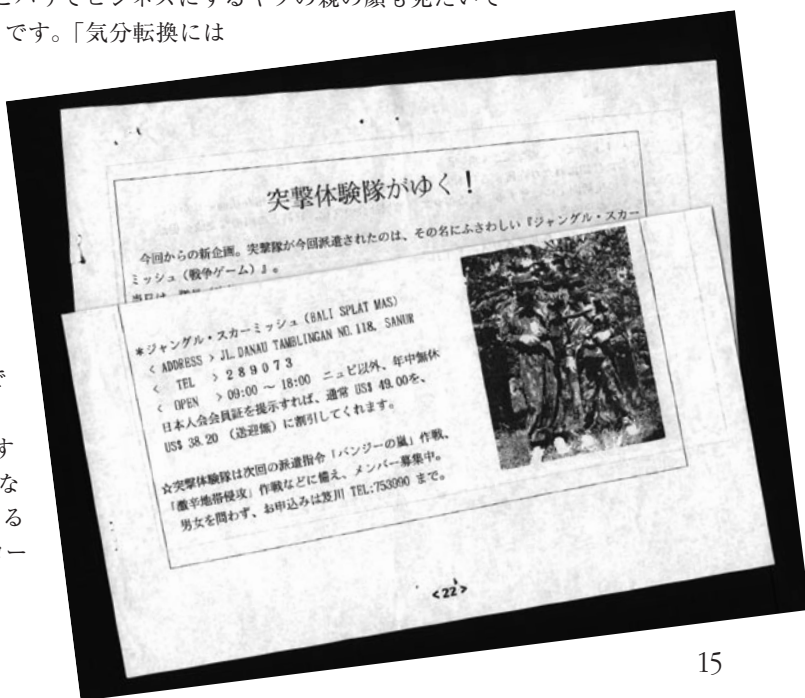
顔、急所にはプロテクターをしているとはいえ、圧縮空気が発射されるペンキ弾は5m 離れている木にバシッ、バシッと当たってつぶれ、迫力満点。」「実弾じゃなくて本当によかった。でもまたやってみたい気持ちがあるから不思議。」「右胸を一発やられました!でも楽しかった。～命中した時は、すっかりして気分転換には最適です。」

ちなみに、この記事を書いたのは、まだ何もわかっちゃいない中学生や高校生ではありません。何やらちゃんとした大手の企業の日本人ビジネス・マンです。

エナちゃんは、日本人会の会報に載った、この記事を読んで猛烈に腹が立ったと同時に、たいへん悲しみました。たった50年前、私達日本人がこの国に対してしたこと。今でも、日本人の顔を見ると流ちょうな日本語で軍歌を唄いだし、おじいちゃんがバリにいること。それを、忘れていいのか、わざと無視しているのか、よりによって、バリの日本人会会報に「戦争ゲーム、楽しいねえっ!」と、ノテンキに載せる、日本人ビジネスマン。「良心」の二文字は、いったいどこへ行ったのだ?! そんなゲームをここバリでビジネスにするヤツの親の顔も見たいです。ちなみに参加費は一人49ドルだそうです。「気分転換には

最適」だなんて、いったいこのヒトは、ここでどんな毎日を過ごしているひとなのでしょうか? 考えてみるとカワイソーでもあります。実は極通編集長から「そんなに、はっきり書かずに、やわらかく非難する文章にしてね」と言われていましたが、エナちゃんダメです。ふだん温厚なエナちゃんですが、こういうモノに対しては徹底して反対です。(ああ、書けば書くほど熱くなるので、このへんでやめよう。)

極通読者のみなさんは、どう思いますか? 「ただのゲームじゃん、なんでそんなに怒るの?」と思いますか? ご意見のあるヒト、どしどし手紙おくれ。今回怒りのコーナーのエナちゃんでした。(鼻息)



ヌサ・ペニダ

黄昏野ライダー

インドネシアのワイロについて報告したのは、つい前回の Vol.17 である。原稿を書き終え記憶もまだ真新しいうち、さっそく現実に直面してしまった。ヌサ・ペニダの旅に出掛けるためパダンバイ港に向かう途中のゴア・ラワあたりで警察の一斉検問に遭遇。「免許証(S・I・M = Surat Izin Mengemudi)拝見」に、テキストどおり一万ルピアを車検証に挟み警察官に手渡したのだが、どうもこの手にはのってこない、今回は特別検問のようである。しかたがないので奥の手で対応。「UBUD!UBUD!!」を連呼し、言葉が通じないふりをして、とほけるしかない。対応している警察官は、変な野郎を止めてしまったと後悔の顔で、英語のできる同僚警察官を呼びよせ私に対応させる。英語で「ライセンスを見せろ」の質問にもひたすら「UBUD!UBUD!!」を叫び続ける。警察官はどうしたものかと困り果て、ついにはあきらめ「GO A WEY」と言って通してくれた。

朝 8:00、UBUD 出発。途中、警察の一斉検問に会ったが、一時間ほどでパダンバイ港に到着。UBUD からパダンバイまではプラマ社のシャトル・バスが毎日出ているので、これで来る方法もある。ロンボク島に渡るフェリー乗り場から少し離れた、ほったて小屋のローカルの受け付けでバイクを持ち込むことを申し込む。船は海岸の砂浜から出航する。一人 Rp:4000-、バイク＋一人は Rp:17000- である。船はチャンディダサ号。20 人乗りの船に、いつもは 30 人ほどの定員のようだが、今日はバイクが乗っていることで人は少ない。他に定員 50 人の船もある。一日に数回、人が集まれば出航する。45 分でヌサ・

ペニダの Telaga 港に到着。午前中は波が静かなおかげで、船酔いもせず快適な上陸であった。

ヌサ・ペニダは魔物が棲む島としてバリの人々に恐れられ、それゆえにその昔、流刑地として使われた島だと聞く。そんなことから、私のこの島のイメージは、鬱蒼としたジャングルと暗闇の中に、少ない島民がひっそりと暮らし、ブラック・マジックが今もまかり通る島を想像している。バイクを船から降ろし、いよいよ未知との遭遇の旅が始まる。

まずは、宿探し。観光客が少ないせい、島には宿が二つしかない。そのうちのひとつ Toyapakeh の船着場にある Losmen.TENANGR に泊まることにした。全室ツイン・ベットの五部屋で宿泊料は Rp:10000- と Rp:15000-。ロスメンが経営しているワルンで食事をしたが、値段をふっかけられ気分が悪く、明日は、もう一軒のロスメンに移動することにする。もう一軒のロスメンは島の中心的な町である Sampala の海岸沿いにあり、役所が経営している。一棟二部屋のバンガローが五棟。庭もゆったりしていて環境も静か、町にも近くて便利。ツイン一泊、Rp:10000- と料金もお値打ちである。どちらもブランケットがないので、用意していくように。テニスコートが一面あるということをつけ加えておこう。

ヌサ・ペニダは連続する小高い丘が島を形勢している。UBUD 近辺なら、さしずめこの丘はすべてライステラスになっていて素晴らしい景観であろうが、この島は極端に降雨量が少なく、石灰岩のゴロゴロとした土地は稲作には適さず、見渡すかぎり荒涼としている。木々も細々と立つだけで、UBUD の豊穡な緑を見慣れた私にはけって豊かなところとは映らない。そして、私の想像していたジャングルはどこにもない。しかし、ツーリング・ファンにはアップダウンあり、急カーブあり、ナイス・ビューあり、そして車の数も少ないと四拍子そろった島である。道路標識がないのと、ガソリンを売っている店が少ないのが玉にキズと言えは言える。



島民に聞いた話によると、その昔、この島にはアグン山より高い山があった。が、アグン山は男性、そしてこの山は女性であった。アグン山は「女性の分際で男性より高いとは許されない」と、山を崩してしまい、今ではブキット（丘）だけの島になってしまった。なんと、男尊女卑の昔話である。丘(Bukit Mundi)に登ってバリ本島を見ると、右手にカラングッサムの山々、ひときわ高くアグン山の全貌が見える。その裾野を左に目を移していくとクルンクン、ギヤニール、サヌール、クタ、ヌサドゥアのウルワツまでもが一望にできる。バリに来て初めてみるバリ島の景観である。この景色を望み、昔、島流しにあった人々は本島に帰りたいと切望したことだろう。そして、今の若者は何でもある本島に渡って生活したいと夢を抱いていることだろう。

ヌサ・ペニダは、今だに昔がある。私はこれで十分に旅を楽しむことができる。しかし、それでは、物足りないという人に、幾つかの観光スポットを紹介しよう。

■ Br:Carang Sariにある Guri Putriの洞窟。

案内表示がないので通り過ぎてしまうので注意。人ひとりが降りるのがやっとという広さの岩の入り口から入り、屈んだ状態で数m進むと、今度はホールのように広い石灰岩の洞窟。天井には無数のこうもりが蠢いている。中には岩から滴る聖水にバリ人がお祈りにきていた。

■ ヌサ・ペニダに島の名前と同じペニダ村がある。どうしてもこういうところがあると行って見たくなり、でかけてみることにした。Toyapakehから一時間弱のツーリング。急な坂を降りたところの海岸端に寺院がある。300m程の白い砂浜の沖合には、岩ばかりの小島があり、波がつくった空洞が奇岩の芸術を表現している。そして、サンセットも美しい。

■ Br:peguyanganの滝。200mもあるかと思われる断崖の中腹にわき水の滝がある。今、その豊富なわき水を飲料水に利用するため、パイプ・ラインの布設工事が急がれている。そのパイプ・ラインの階段でわき水の出る滝に降りる。洞窟から溢れ出る清水。そこから眼下の海原の景色を眺めてのマンディーは最高に心地よい。ここはほとんど現地の人しか知らないー現地の人も知らないースポットである。



●船中の善者とバイク



● Br.Peguyanganの滝。湧き水のマンディ場から海を見下ろす。



ぶん●中田恵 / いらすと●佐藤純子

● 10月24日

自然体でいられたらそれが一番いい、勿論そんなことはわかってはいるのだが、やはり一人旅はどうしても肩に力が入る。ヌガラのようなところは、長く滞在すればするだけ魅力を発見するだろうということはおぼろげながら思った。どっかと違って人々が“観光客慣れ”していないのだ。ほったくろうとする人もいなかったし、ルママカンでもホテルでも押し付けがましくない暖かさを感じた。その上街はのどかできれい。せめてあと2泊くらいすれば良かったのだが、結局この日私はヌガラから一気にサヌールまで来てしまった。でもその理由がどうしてだか、私には何となくわかる。昨日ジェゴグを聴きながら伊藤さん達と楽しく話をして、私の中で“もう我慢できない、早くウブドへ帰りたい”という思いが目覚めたのだ。朝食を食べてホテルをチェックアウト。ちなみに Wira Pada の

朝食はパイナップルジャムのジャッフルにゆで卵が2個。結構なボリュームでした。今日も又長旅だ。ヌガラのベモステーションからデンパサール行きのベモに乗る。なんと今回は長距離にもかかわらず車体はただのベモである。余裕を持って乗れば12~3人で一杯になってしまうだろう大きさだ。今回は割りと早い時間に乗り込んだので一番後ろの席で荷物を足元に押し込み、とりあえず一安心していたのだが、とにかくどんどん人が乗り込んでくる。荷物も一杯積んでなんと23人が乗り込んだところでベモは発車。このベモ結構客の乗り降りとは関係ないところでよく止まる。車掌は、止まった付近の店に、あるところでは荷物を届けたり、封筒を渡したり、まるでバイク便ならぬベモ便である。その間、誰も文句も言わずじっと待っている。バリ人のこんな忍耐力にはいつもながら感服するが、だけど考えてみたら日本人だってあの超殺人的朝のラッシュに文句一つ言わず耐えているのだ。あれだって外国人から見たら考えられないことなのかもしれない。そんなこんなでベモがしょっちゅう停車することに加えて、長距離バスと違って車体の小さなベモはなかなかスピードが出ない。しかも坂道になるとぐんとスピードが落ちる。当たり前だ。絶対重い筈だ。しかし対抗車線にパンクした長距離バス1台発見。どんなにスピードが出なくてもあれよりはましかもしれない…。このデンパサール行きのベモ、ほとんどの客がデンパサールへ行く見え、途中で降りる人が非常に少ない。結局私はほとんどタバナンあたりまでを、身じろぎすらできない姿勢で耐えることとなったのだ。2時間少しでバスはウブンベモステーションへ到着。3千払う。

ウブンで又シガラジャの時の様に取り囲まれてしまったらどうしようかと思っていたのだが、さすがにここではちらほらと外国人の姿も見え、私の所だけに人々が群がるということはなかった。一安心。“クレネン”と書いてある看板の下まで歩き止まっていたベモに乗り込もうとするとベモステーションのパパが「サヌールまで直接行くよ」と言うのではないか。「え？これサヌールまで行くの？」「行くとも。君が6千出せばね」でた！ヌガラからデンパサールに着いた途端にすぐこれだ！聞き流してベモに乗り込む。又してもよくここまで人を乗せるよ、という程、人を積みベモは発車。10分ほどで見覚えのあるクレネンに到着。5百払ってベモを降りると、ここでもまたパパが寄って来る。“Special?” スペシャルにするのなら最初からベモステーションには来ません。まったくも一、とぶつぶつ言っていたのをウブンから一緒だったバリ人の男の子が笑って見て

いる。サヌール行きのベモに乗り、サヌールはJLダ
ナウタンプリンガンの丁度真ん中あたりでベモを降り
る。千払う。ヌガラからサヌールまでトータル4500。

ところが、ここからがいけなかった。ホテルを探し
たのだが、ない！！勿論沢山あるのだけれど、どこも
どうも、泊る気になれないのである。本当はビーチに
面しているホテルが良いのだけれど…だってだってサ
ヌールビーチをばーと眺めながら、寝転がっている幸
せと言ったらない。ウブドも大好きだが、サヌールの
この怠惰な過ごし方はなかなか捨て難い。でもでも、
ビーチに面して建つホテルは、最低でも40ドル。一
人旅には贅沢だ。まだまだこれからウブドで1ヶ月以
上過ごすのだもの。今から贅沢は出来ないわ、と手頃
なホテルを探せば、これがありそうでなかなかないの
だ。ひとつ、Homestayでプール付きのところを発見。
しかし“Salt Water Swimming Pool”と恐ろしいこと
を書いてあったので、パス。なんだか目がチカチ
カして来た…。延々歩き回って、(途中トラ
ンスポートのおじちゃんに“ウブドまで
10ドルで行くよ”と言われ、よっぽど
もうウブドに帰ってしまおうかと思っ
た)結局最初に当たりをつけておいた
Swastikaにチェックイン。6万6千
を3泊するというで1泊5万6千
にしろ。だいぶ予算オーバーで
あるが、やっぱりここはサヌールである。
アイルパナスは勿論のこと広々とし
たバスタブ付きだ。これは思ったよ
り嬉しかった。ないならないで水シャ
ワーで大丈夫なのだが、浴槽にお湯を
ためて手足を伸ばせば、ああ、やっぱ
り身体が“気持ちいい”と言うのだ！
その気持ちよさに気がついた私は、と
んでもないことをしてしまった。日
本料理店に行ってしまったのである。
今日はどうもナシ・チャンプルーも
パスタもシーフードも食べる気にな
らなかったのだ。これはやはり私の潜
在意識の中に、昨日の影武者御一行、
パパ伊藤が入り込んで来ていた、と
言わずしてなんとおおうか。で、ピン
タンのドラフトをいただきながら“ざ
るうどん”の夕食である。実に嬉しい
味なのであったが…なんとこれだけ
で16300RP、この旅行中一番高い食事と
なったのであります。

こうしてサヌールで3日を過ごし、私は
懐かしいウブドに戻ってまいりました。最初

はもっと1ヶ所をじっくり見て回る、それこそ1ヶ月
くらいかけて1週の旅をするつもりでいたのだけれど、
どーも情けないことに1週間たつ頃からウブドへの里
心がついてきて、結局2週間でとっとと帰って来てし
まった、という感じです。それでも短い間に本当に沢
山のバリのの人に優しくしてもらって話が出来て、良か
った！と今は思っています。

バリを訪れる度に、東京で培われた私の価値観は音
をたてて崩れていきます。それが余りにも明快なので、
面白くて、気がついたら会社まで辞めて、バリにはま
りこんでしまいました。これからは、もっとずっと長
く深く、私なりのスタンスで、バリとのお付き合いを
続けていきたい…今、本当にそう思っています。バリ
の神様、よろしくお願ひ申し上げます。

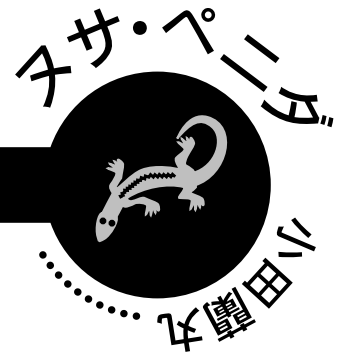
●おわり●





● Baris Jang Kang

オダラン体験（ヌサ・ペニダ）



11月20日(28/KELAW-Buda Wage) ~ 22日、Pr.Penataran Ped・Klungkungのオダラン。Pr.Penataran Pedはクルンクン県のヌサ・ペニダにあり、ヌサ・ペニダはバリ島の東部南海岸のクサンバからが最短距離で、14km離れた島である。前々から行ってみたい島ではあったが、なにせ島へは小さな船に乗って渡らなくてはならない。船酔いをする私にはかなり勇気のいるオダラン参りである。プラ(寺院)は海岸添いの村Pedにあり、海辺の砂浜が切れたところに建っている。方角はグヌン・アグンを背にし、Pr.Ratu Gede Mas Meealing、Pr.Ratu Lingsir、Pr.Taman(掘りに囲まれたプラ)、Pr.Segara(魚の王様の石彫がある)、の四つのプラで構成されている。オダランには島民以外にも信仰心の厚い多くのバリ・ヒンドゥー教徒が船に乗ってやってくる。ワンティランで夜を明かす人も多い。

PM/3:00、お祈り(スンバヤン)をさせてもらおうとプラに向かう。一番広いPr.Ratu Gede Mas Meealingからクندان(太鼓)の音と同時に、槍の先が動くのが見えた。オダランの初日などに踊られるバリス・グデで使う槍なので、きっと踊りが始まるのだろうと行ってみると、プラの入り口に向かってマンク(司祭)たち数人が座り、儀式をしている最中であった。そのうしろでソンケットで正装した男性が二列になって槍を持っている。儀式に見入っていると、しばらくして、プラの外がバレガンジュールの音でにぎやかになりだした。儀式はどうもこれを迎えるために行なわれているようだ。そして、割れ門からご神体を頭に乘せた女性を先頭に、一団が入ってきた。それと同じくして槍を持った男性たちが踊り始めた。踊りは右手に槍を持ち、上体を前屈みにし、左手を泳ぐような動作の初めて見る振り付けの踊りである。名前は“Baris Jangkang”

といい、この地方独特のものでそうだ。一団の中のマンクが踊りながら入って来て、いきなり私を見つけてニコリした。どこかで会ったことがあるのだろうか、しかし、初めて来た村、そして、こんな遠いところにマンクの知合いはいないはず。誰だろうとしばらく考えたすえ、スカワティのマンクであることを思いだした。スカワティでワルンを開いて、耳にピアスをしたお洒落なマンクである。その後からクラウハンした男性が一人入ってきた。儀式はしばらくつづいたあと、奥の境内に入っていった。そして、境内を右廻りに三回廻ったあと、一団は

Pr.Ratu Lingsirに移動しスンバヤンを始めた。この時点には三・四人のクラウハンした人がいた。この一団のスンバヤンが終わったをあと、私も四つのプラすべてでお祈りさせてもらった。小さな島だからなのか、それとも海岸近くのプラだからなのか、どのプラの聖水も塩っぱかったのが印象的であった。もうすでに夕暮、まだまだお祈りに来る人で境内は賑わっている。ワルンのイブに「今夜、どんな芸能がありますか？」がと聞くと、「トベンがある」と教えてくれた。どんなトベンが観られるか今から楽しみである。



● Pr. Taman



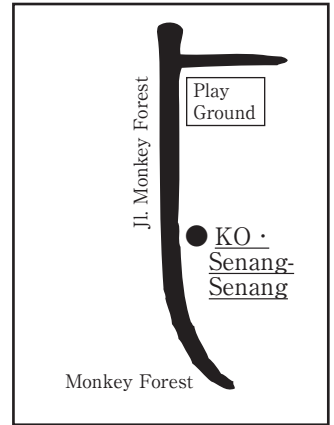
Toko ◇ BEST 店

KO・Senang-Senang

ウインドウに大きくお店のロゴがペイントされていて、たくさんある Jl. モンキーフォレストのブティックの中でも、ひときわ目をひく店がまえ。

店内はゆったりと広く、奥には、ちょっとお茶できるカウンターもあってステキです。素材はポリエステルとコットン中心で、オーガニックっぽいブラウスやワンピースは、とってもおしゃれだし、ロゴ入りのチビTシャツも今っぽくて超キュート！ きっと、日本に帰ってからも大活躍するアイテムばかりだと思います。また、大小、色デザイン、様々な手さげカゴがた〜さん揃っていて、アレコレ目移りしちゃいます。今後は小さなカゴポーチも種類を増やしていくそうです。サイズはわりあい日本人サイズで、体にフィットするデザインの物は2サイズあるそうです。

Jl.Monkey Forest Ubud Bali 80751
Telp/Fax 62-361-977149



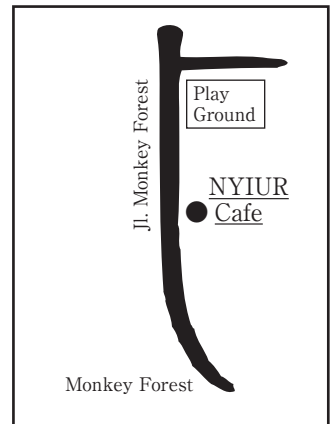
Warung ◇ 味な店

NYIUR Cafe

はっきり言って「ここはどこ？」っていう位、オッシュャレーな雰囲気のカフェでございます。午後の風に吹かれながら、文庫本片手にお茶しに行くにはピッタリです。アイスカブチーノ飲みながら、ポストカードをしたためるなんてのもチョチョ！モンキーフォレストのショッピングに疲れたら、是非行ってみてください。エスプレッソ、カフェオレ、ストロベリージュースなど、お茶関係の種類は豊富。ケーキも手作りケーキが何種類も揃っていて、あんまりギトギトに甘くなくて美味しかったです。お食事は、ヨーロッパからエスニック、さらに日本食までと守備範囲は広いのですが、「おおおっ、うまいっ！」って感じではなかったです。でもステンレス張りの厨房がすごく清潔で、盛り付け等も美しいのでホテルの食事みたいな安心感はあると思います。

そんな訳で、「優雅にくつろぐ南国のパケーション」というシチュエーションに思いきり酔ってみるには最高のお店です。あ、そうそう、頼んだアイスカブチーノやジュースが妙に水っぽかったんですが、聞くとところによると、この店は「水が自慢」なんだそうで…、そのせいなのかどうか、未だ謎のままです。

Jl.Monkey Forest Ubud Bali
Telp 0361-975554



本店紹介 +
Tokoz Sayang

私の常宿

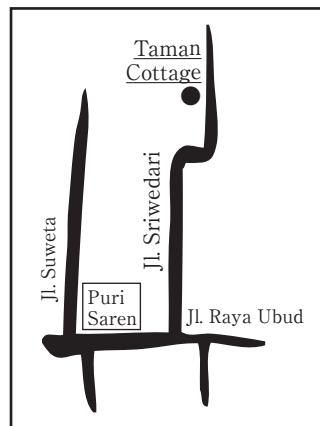
Pondok Manis

TAMAN COTTAGE

中期滞在者 A

UBUD は、中心である王宮から2キロほど離れると、田んぼのある景色になる。一ヵ月以上の休暇がとれると私は、田んぼの中にある静かなタマン・コテージにステイする。トンボや蝶、リスや鳥、そのほかいろんな種類の動物や昆虫がいて観察できるのが好きだ。ちょっと広めの窓からは、青空とココナツや色とりどりの花が目飛び込んでくる。夕方5時頃から、ココカン（白鷺）たちがコテージの上空を舞い巣に帰る姿が見られる。青空に浮かぶ白いココカンの姿は優雅で美しく、それをテラスや庭で“ぼーっと”眺められる大好きである。ロータス池のある広い庭は、いつもきれいに整理されていて気持ちがいい。部屋数が四つしかないの、たとえ満室になったとしても、静けさは守られる。

料金はバス・タブ、ホット・シャワー付きで一泊、40000-Rp。長期滞在にはディスカウントがあります。



Jl.Sriwedari Taman Ubud
Telp:96477

旅人一声 Pesan & Kesan

西村智彦

93年に日本中の景色がモノクロで見えるようなことがあって2度目のバリにきました。仕事や遊びで日本全都道府県を走破している私は、ここバリも旅の達人(?)の一頁にしてやろうと思っていました。ところがそれから6回バリに来て頁は増えるばかり。今やバリ巡礼は私のライフワークとなりつつあります。ングラ・ライ空港に降り立った時に体感するあの匂いと湿った空気はいつも懐かしく、また来ることができたと思わずニヤリとしてしまいます。

そんな私が今バリでの楽しみの中のひとつにしているのがユリアティちゃん。極通の読者なら説明は知らない、ご存じあのグヌンサリでレゴンを踊るスーパーアイドルです。もともとバリダンスやガムラン音楽は好きで旅の目的でもあったのですが、華麗で緊張感溢れる彼女のレゴンを初めて見たときからファンになってしまいました。最初見たころは何か憑かれたような迫力ある踊りだったのが、今回は時折微笑みを見せてくれるようになりました。勿論、彼女独特のフォームで踊られるレゴンは素晴らしく、美しい女らしさがプラスされた彼女はもうユリアティちゃんではなくミス・ユリアティでした。

レゴンドダンスのチョンドンは若い時しか踊れないらしいので何時まで彼女のレゴンが見られるかわからないのですが、機会があったら是非ご覧下さい。本当に素晴らしいですよ。



■ふたりの Seniman の Happy Wedding!!

バリでは、アーティストのことを Seniman と言います。今回は活躍中の Seniman ふたりの結婚をご報告しましょう。

ひとりには、I Ketut Cater 氏。皆さんご存じの Semara Ratih のクندان奏者であり、わが Gianyar 県の誇る若手ガムラン界のホープ。あちこちの Sanggar (私設のガムラン・グループ) の指導者として活躍するかたわら、アート・フェスティバルのゴンクビヤール・コンテストのために、毎年のように新作のガムランの楽曲を作曲するなど、Seniman 中の Seniman です。そんなチャタルのお嫁さんになったのは、Mas 村のワヤンちゃん。12月28日、Saba 村の Pinda にある、彼の家で結婚式は行なわれました。式に参列した友人達はみな Seniman ばかり。幸せそうな新郎新婦そっちのけで(?!) ガムラン談話に花が咲いていました。

そして、もうひとりには、プリアタン・Tegas のスーパー・ダンサー、I Ketut Rina。タガスのリノと言えば、そうです、グヌン・ジャティのケチャで、スグリーウォ役のド迫力パフォーマンスを魅せてくれる、あのダンサーです。小さな頃すでに Jakarta の現代舞踏演出家、サルドノ氏の目に止まり、以来、バリ・ダンスのみならず、コンテンポラリー舞踏家として、ジャカルタ、ジョクジャ、そして、世界各国へ招かれて踊っているリノ氏です。彼は、同じ村のマデちゃんと12月19日、めでたくゴールイン。



チャタル氏もリノ氏も Seniman は、あねさん女房タイプのおふくから美人がお好みそうですね。(この原稿は昨年バトゥプランの Seniman に嫁いだ Y 女子 - ちなみに彼女もあねさん女房のおふくからタイプ - が書いたものです)

なにはともあれ、両氏の Happy Wedding、心から祝福します。

Selamat menumpuh hidup baru!!



■鈴木スミオ氏個展開催!!



去る1月4日、Kutuh にあるアート・ギャラリー「BLUE MOON」にて、家具デザイナーとして活躍中の鈴木スミオ氏の個展が開かれました。オープニング・パーティーには、各国のアーティストや友人

うぶっなトク その18 ぼりり

がつめかけ、賑わいました。鈴木氏はバリ在住4年。それ以前もアフリカ・ケニアにある、リゾート・ホテルをはじめ、数々のホテルやレストランのインテリア・デザインを手がけたり、と活躍の舞台はインター・ナショナル。そんな鈴木氏が今回の個展で見せてくれたのは、家具（椅子）をはじめ、手すきの紙、ガラスなどを使ったオブジェ、彫刻、など。バリにあるマテリアルをコラージュした作品たちは、どれもユニークであり、そして、とても美しいものであります。個展は1月末まで開催されます。これからも、ここ UBUD でどんどん、ステキな作品を作ってくださいね。鈴木さん!!

SEMARA RATIH 公演、新メニュー

本誌 極楽通信の読者の中にもファンが多い SEMARA RATIH (スマラ・ラティ)。毎週火曜日、Kutuh (クトゥ) 村集会所での定期公演で、新しいメニューが登場しました。"THE HEARTLAND OF BALI" とタイトルされたプログラムは、

▶ インスタルメンタル

「GORA MERDAWA」

1991年、アート・フェスティバルのためにニョマン・ウインダ氏が作曲した名曲。ゴン・クビヤールの舞臺力をあますところなく聴かせてくれます。

▶ おなじみ「BARIS」。あの迫力は変わらず。

▶ 「LEGONG SEMARADANA」日本公演で観てくれたためずいぶんシグン・スマラダナ。すばらしいレグンです。

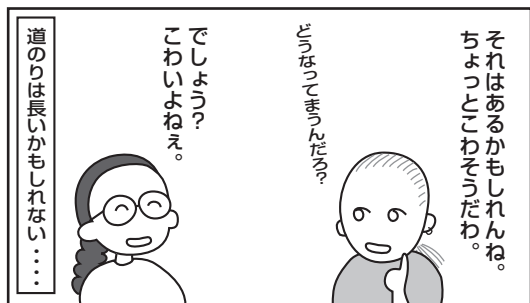
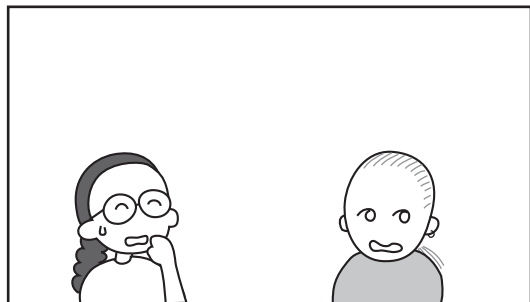
▶ 「TELEK」めったに観られないテレック。女性が仮面をつけて踊るマジカルなダンス。

▶ インスタルメンタル「KINDAMA」こよもウインダ氏作曲の臨場感ある曲。

▶ 「JAUK MANIS」チビちゃんによるジャウク。

▶ 「BARONG KET」バロンの足の演技にビックリ!! ウワサによるとA.A.アム氏が中に...??

以上、これはSPECIALパフォーマンスなので、必ず



【年間購読申込み方法】

エアメールで、その旨手紙をください。宛先は「影の出版会：伊藤」、住所は巻末のBALI本部です。料金は、4,000円。お返し申込み用紙と送金方法をお知らせします。また、お急ぎの方は、郵便振替用紙の通信欄に年間購読希望と書いて送金してください。振替先口座：00190-6-573859「影の出版会」です。

毎週観るワケではないけど、運よく観たヒト。ラッキー!!



Illust: Cizuru

お・し・ら・せ

えろえろ 新春の季節の日本の皆さま、いかがお過ごしですか？ '96年度版極楽通信・UBUDを一年間ご愛読下さり、どうもありがとうございます。遅れに遅れ最終号がやっと完成しました。

さて、'97年度版の購読お申し込みのご案内です。えんぼわけい。'97年度版初版、Vol.19はもしかすると新録の頃になってしまいかもしませんが、なるべくばんぼろ2年内のうすにたくさん出るとお思います。

- ▶ '97年度版も年間購読、計6冊 (Vol.19~24) 発行、送料込みで4,000円です。
- ▶ 郵便振替用紙を今回、同封にありますが、お早めにお申し込み下さい。
- ▶ 読者の皆様からのご意見、ご希望、イラスト&原稿、ごんごんばん、何にもお待ちしています。バリ本部までどうぞ。

この場を借りて、'96年度版発行に協力して下さいの方々、^{または日本連絡先}ほりりさん & えりりさん、ちづるちゃん、ふみおちゃん、をはじめ、皆さんに、極通本部お感謝の涙と、あふゆる愛を、送ります。Terima Kasih Banyak !!!!

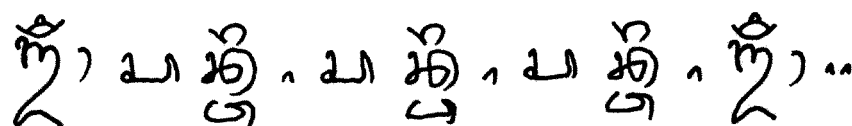
Pengumuman

ごんごんばん

■タガ見かけませんでしたか？

年末年始、BALIに行っていた者です。私は、いつもバリに行くとき、ングラライ空港に着いた段階で「タガをはずして」滞在中は思いきり遊ぶようにしています。そして、帰る時にまた「はずしたタガをはめて」日本に戻るのが、今回どうやらそれをなくしてしまいました。空港のどこを捜してもはずした私のタガが見当たりません。しかたなく日本に戻ったのですが、どうもタガがはずれっぱなしで困っています。もし私のタガを見かけた方がいらっしゃいましたらご連絡ください。

東京在住/きりん





Terima Kasih



発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 / 佐藤由美 / えりり / 堀 祐一

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真：堀 祐一 / 伊藤博史

カバーイラスト：津田さと子

極楽通信「UBUD」Vol. 18

1997年2月15日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha
Jl. Suweta No.16, Ubud. Bali,
80571, Indonesia tel.(0361)96134

©1997 影の出版会 禁無断掲載





影の出版会事務局

- BALI 本部 Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16,
Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)96134
- 日本連絡先 〒 106 東京都港区麻布台 3-4-4 Iikura Comfy Homes B-102
ポトマック株式会社内, tel.03(3583)0801 fax.03(3583)0803